



第132号

2020年6月1日発行

千葉大学教育学部
同窓会

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33

思い出の地に立つ

同窓会監事 野内 修
(S45・3卒 船橋市)

もとより浅学菲才の身、齢七十二を数えるも、胸を張って他に誇れるものが見当たらない。ただ一つだけ、昭和四十五年四月、船橋市立小学校に奉職以来、昭和と平成を十九年ずつ、現場と行政もほぼ半ばの十八年と二十年、つごう三十八年間、健康で体育一筋に職務を全うできたことを心密かに誇りとしている。

縁あって同窓会の監事を仰せつかって六年が経とうとしている。監事としての初仕事の日。卒業以来、半世紀に及ぼうとしているのに、それがごく当たり前のように、足は体育館、陸上競技場に向かつていた。その後も大学を訪れる度、飽きもせず、用務の前にかの地に立っている。その理由ははっきりしている。

私は、来し方、とりわけ健康・体育に関してわけありであった。小・中・高校と体育の評価は3を上回ったためしが無い。高二の四月には、急性肝炎で入院した。「三

十七キロ、色も白くてうらやましい」と看護師に言われた。以来、卒業まで体育はほとんど見学といった有様であった。

その私が、健康で体育一筋に三十八年間の職務を全うできたその土台は、まさにこの地での四年間（真黒に日焼けして帰省するのが唯一のおふくろ孝行だった四年間）に培われたものと確信している。大げさを許してもらえなら、この地は私にとっては聖地ともいえる場所なのである。



さて、大学を訪れることがなくなって久しいと思われる皆さん、絶好の機会が間もなくやって来ます。千葉大学教育学部は二〇二二年に創立百五十周年を迎え、その記念式典が十月に開催される予定です。この機会に是非お誘いあわせの上、大学に足を運び、それぞれの思い出の地に立ってみてはいかがでしょう。

紙面紹介

特別寄稿	6面
学校現場から	2面
学校現場へ	3面
会員のいきいき だより	4・5面
私の学園生活	7面
卒業を迎えて	8面
県外同窓生から	9面
我が学舎の今昔	9面
現役の学生から	10面
支部だより	10面
新入生の声	11面
事務局より	11面
物故会員	11面
同窓生の美術館	12面

印旛官員共立学舎を訪ねて

同窓会報編集委員 高津 乙郎
(S48・3卒)

ている。

この「共立学舎」を「千葉師範学校発祥の地」として名を残そうと、流山の教育関係者有志が、学制の原点に立ち、教育の振興を願った。そこで、印旛官員共立学舎跡に、昭和五十七年十一月に「千葉師範学校発祥乃地」の歴史を刻む黒御影石の大きな石碑を建立した。また、「共立学舎」は「流山小学校」として残り、現在は、場所を移し、「流山市立流山小学校」に引き継がれている。



高津記念誌編集副委員長
(印旛官員共立学舎跡地に立つ)

二〇二二年(令和四年)に教育学部創立百五十周年を迎えるに当たり、教育学部・千葉師範学校の原点となる「印旛官員共立学舎」を町田会長、八木・重栖・古山副会長、宮葉・高津記念誌編集委員、佐藤事務局長・水野事務局次長の八人で訪ねた。場所は流鉄流山線の終点「流山駅」から徒歩一分、住宅街にある鎌倉時代に創建された歴史ある日蓮宗常興寺の境内にあった。明治五年に明治政府は日本最初の近代学校制度を定めた『学制』を發布した。これを受け、印旛県は寺子屋を廃止し、この地に「印旛官員共立学舎」を開設した。「共立学舎」は小学校教員になろうとする人々に教授の内容・方法を習得させる場であった。印旛県内各地から選ばれた人が試験の後に入學、六十日間教授法を学び各地の小学校教員になった。翌年、印旛県と木更津県が合併してできた千葉県の発足に伴い、千葉町に移転し「千

葉学校」となった。

この教員養成を目的として開設された「共立学舎」は、「千葉師範学校」「千葉大学学芸学部」等々名称が変わり、現在の「千葉大学教育学部」に引き継がれてきている。

県外の同窓生から



ゆつくりじつくり、夢を形に

王子 千帆子



(H10・3卒
東京都)

フリーアナウンサーをしています。大学時代にアナウンサーになると決意したものの就職浪人。研究室の明石先生の助言もあり、留年の末、念願の地方局のアナウンサーに内定しました。岩手と地元・熊本の放送局で約十五年間アナウンサーを務めました。報道から情報番組まで充実した仕事の中で様々な出会いや試練があり、「熊本市の政令市移行」や「こうのとりのゆりかご」など取材を通して、物事を掘り下げて考え、伝えられた経験は財産です。大切にしている事は、声を鍛える・体調管理を怠らない・人の話を遮らずよく聞くことです。技術など何か壁にぶつかったら発声練習・複式呼吸に立ち戻っています。三種の神器と言えば、NHKのアクセント辞典・ストップウォッチ・電子辞書。今も仕事の時は必ず持ち歩くお守りのような相棒です。

結婚し主人の留学に伴い退社しましたが、オーストリア・ウィー

ンでの二年間の暮らしは毎日が新鮮で濃厚でした。娘を出産し、子育てを始めた忘れがたい土地です。帰国後、育児の合間に執筆し、生活体験や取材情報をまとめ、本を出版しました。ウィーンで特に感銘を受けたことは、音楽をはじめ芸術文化が日常に溢れ豊かなことや大学まで学費が無償化であること、必要な人に席を譲るなどの道徳心が根付いていることです。クリスマスマーケットのホットワインやお昼から白ワインを楽しむ風習なども最高ですね(笑)。一方、恋しくなったのは和食、日本の手厚いサービス(店での応対や郵便局の再配達など)。ご関心のある方は是非、著書『麗しのウィーン、音に魅かれて』をご覧くださいませ。現在は、子育ての傍ら司会業や日本滑舌能力検定協会の講師として活動しています。声を出すと元気になるホルモンが出て病気になるにくいそうです。一緒に滑舌力アップや声磨きをしませんか。好きな本や詩などを声に出して読んでみるのも良いかも知れません。私自身、健やかな心身を保ち、細く長くアナウンサーを楽しむことが目標です。



私の三種の神器

我が学舎の

今昔(五)



千葉大生協

宮葉 清子

(S50・3卒 千葉市
同窓会報編集委員)



1970年(S45)頃の店舗全景

「より良き生活と平和のために……」をスローガンに掲げ、昭和四十年に創立された西千葉キャンパスの学生協。工学部北側にプレハブ店舗があった。パン・牛乳・食品・日用品・文具などの限られた品の販売であった。二年後に書籍部が開店した(北田書店)。

現在は大学会館正面の左側(昭和四十年代にあった新厚食堂の場所)に、「ライフセンター」という名称になっている。コンビニより品揃えが充実し、文具や日用品・食品・焼き立てのパンまで販売し



2014年(H26)10月開店

ている。また、トラベルセンター、住まい、アルバイト紹介センターまである。書籍は、附属図書館の一階、ガラス張りの店舗「ブックセンター」で扱い、専門書から文庫・コミックなどまで幅広く、これも充実した品揃えである。



2012年(H24)10月開店

同窓生の美術館



生きている実感



イラスト：新崎寛子

広島大学教育学部
副学部長

一 鋤田 徹
(S 63・3 卒
東広島市)

広島大学に勤務するようになって二十六年。この間、公募展や個展等で様々な彫刻作

品を発表してきたが、そのどれにも共通するキーワードが「生きている実感 (REALITY OF LIFE AND DEATH)」。

構想は私的な出来事に端を発している場合が多いが、それを普遍性へと繋げられるような作品づくりを目指している。きっかけの一つは、伯母が千葉の国立病院に緊急入院したところ。死に直面していた伯母の一方で、隣接していた中学校の、まさに生を謳歌している生徒たちの姿が強く目に焼き付いている。もう一つは、人類史上初めて原子爆弾が投下された街ヒロシマでの暮らし、否応なく彫刻をつくる意味について考えさせられる。

- ①②被爆建物（広島市立本川小学校）での個展風景
- ③家族をテーマにした作品『永遠の家族』
- ④広島大学病院のモニュメント『FOUR SEASONS TREE（四季の木）』（写真は夜間の照明点灯時）

編★集★後★記

昨年秋の台風被害により精神的にも大きなダメージを受けていた矢先、市原のチバニアン朗報は千葉県民はもとより日本中を沸かせた大ニュースとなった。

▼そして、令和二年一月、

いよいよ東京オリンピック・パラリンピック開催年を迎え胸躍らせていた。そんな矢先、新型コロナウイルスが世界的に蔓延し悲痛な毎日。年初めには予想だになかった東京オリンピック・パラリンピックの延期。本来ならば、チバニアンの多数の見学者の様子が連日報道されるはずが一変。何とも虚しい限りである。▼さて、今号も多岐に渡る内容で紙面が埋め尽くされた。原稿と共に貴重な写真もいただき感謝している。本文に目を通してながら写真にも気持ち注がれる。全面カラー印刷にして五年目。すっかり定着し見やすいと好評である。とりわけ今回は、



一面の「印旛官立学舎跡地」にある記念碑の大きさに驚きと関心を持たれる方が多いと思う。

（文責 水野平吾）